

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
日本画	教授	北田 克己	今年度の研究では特に個展「EQUUS」に大作4点を含む20余点の発表が主要な業績であり、新たな主題と表現に取り組んだ。科研費研究における伝統的材料の研究ネットワーク形成においても海外への広がりを見た。 また、サマーコースでは専攻の教員のみならず若手スタッフ、学生も参加し、多様な実践的教育につなげた。
日本画	教授	岡田 眞治	経営審議会、役員会、教育研究審議会、学長補佐会議などの会議が多くて多忙な年となった。
日本画	准教授	井手 康人	目標はどの項目においても充実した内容を行なうことができたと思う。
日本画	准教授	吉村 佳洋	日本画の制作研究においては個展や公募展への発表を通じ、自身の研究内容を客観的に考察する事が出来た。再興第104回院展においては奨励賞を受賞する事が叶い、研究の成果が上がっている。 今回の受賞を今後の制作にも活かせるよう研究を重ねたいと考える。
日本画	准教授	岩永 てるみ	研究活動、教育活動、大学運営、社会貢献共に当初立てた自己の計画を概ね達成出来たと考える。
日本画	准教授	阪野 智啓	日本画分野では個展での反響をきっかけに、より制作の方向性を「歴史画」に移行させたい。教育では大学院での指導がやや不足したと感じている。非常勤講師との連携も含めて見直したい。研究分野では、「月次祭礼図模本」関係の発展性が大きく、12月の早稲田大学での発表や3月の書籍出版が控え、来年度にも公開研究会を予定している。「やまと絵研究」について他分野の人脈も増え、複数の領域のハブとなれるような存在を意識していきたい。
油画	教授	寺内 曜子	本年度は途切れることなく、国内外で展覧会があり、作家として充実した1年だった。作品を効果的に見せる展示を美術館内での実践を通して精度を高める事ができた。特に台座の使い方では新たに学ぶ事が多かった。MOTコレクション展での発表と、退任展で、新旧の作品を多数見せる事ができ、私の作品のコンセプトを正しく理解し興味を持つ美術関係者が増えた事がよかった。「引込線・放射線」では活躍中の作家・評論家達と知り合い新たな連携が築けた。研究室の院2佐藤久美子が修士作品で優秀作品賞を受賞した。
油画	教授	設楽 知昭	個展を開催したり、グループ展などに参加して、研究活動は充実した。 選考委員（新任人事）において努力した。 中経連と名古屋市が連携した「イノベーターズ・ガレージ」（ナディア・パーク）の美術作品の展示をサポートした。
油画	教授	阿野 義久	東京での研究発表を行い、少しずつではあるが着実に成果を上げていくと実感している。大学での業務は多忙ではあるが、社会貢献においても美術展の審査員や宮川村のジャンボクロンワークショップ、岐阜県立加茂高校での出前授業などを行い地域と受講生に喜んでいただいた。今後も継続してゆくことで合意している。
油画	教授	倉地 久	研究・教育・運営・社会貢献に対して、バランスよく自身が努力し本務を遂行できたと考えている。特に、資料館長・芸術創造副センター長・教研審メンバーとして、大学運営と業務に昨年より一層深くかかわり、助力できたと考えている。また、国際交流に関しても自己の教育・研究をより深める成果があったと考えている。
油画	教授	額田 宣彦	研究活動～目標を達成、研究を深めることができた。学生研究アトリエが狭く拡張の必要性を感じた。・教育活動～ゼミ、作品講評会、討論会、レクチャー等を全学年に渡り実施。学生の自主性、思考力、実践力を育めた。・大学運営～当初計画より業務（委員会）が大幅に増加し研究活動の一部に支障があった。次年度は研究とのバランスに配慮したい。・社会貢献～「GROUND」ホームページの改善・グループ展の充実。

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
油画	准教授	井出 創太郎	本年度の研究活動は、銅版画による立体作品制作が中心となり、瀬戸現代美術展2019及び女木島「光射の器/島の影」展での発表を行なった。特にMEGI HOUSE (女木島/香川) で発表した銅版画による立体作品は、今後の腐蝕銅版画研究における重要な展開を孕むものとなり、大いに成果のある年度となった。
油画	准教授	高橋 信行	各項目とも一応の納得がいく結果を残せたと思う。 今後もこの調子を維持できるように努力したい。
油画	准教授	白河 宗利	研究活動においては、個展を2回開催、台湾高雄アートフェア (ART KAOHSIUNG) にも出品し、専門である絵画の技法材料研究の新たな知見や成果が上がった。その一方で、理論研究や外部から依頼された業務、大学運営の比重が大きくなりすぎている感があり、来年度からは創作研究とのバランスを取りながら進めていく必要がある。
油画	准教授	岩間 賢	研究活動①②③は、2020年に開催される芸術祭において国際的な成果発表となる。研究活動④はプロジェクト開始20周年を迎え、新たなステージへと発展・継承されることになった。研究活動⑤は東京オリンピック・パラリンピックのリーディング芸術文化プログラムとして、東京都美術館で展示し東京大学で研究成果を発表した。教育活動では着任後の2年間に渡る教育内容を検証し、学生に沿った質の高い実技授業カリキュラムに再編した。さらに博士後期課程の学生指導にも関わった。大学運営では、芸術資料館運営委員として卒業・修了制作展の展覧会運営や東京アートフェアの企画運営に関わった。社会貢献では、文部科学省中国政府奨学金審査委員に加え、岐阜県白川町と千葉県市原市のレジデンス審査員をした。他、全国各地でワークショップや講演なども行なった。
油画	准教授	大崎 宣之	研究活動として、国内外にて個展、グループ展を合わせて12件 (国内9/海外3) の作品発表や外部研究助成への採択、アーティストインレジデンスへの参加による海外活動など、充実した研究を行う。大学運営として各種委員会、愛知芸大芸術講座の企画 (2件)、また社会貢献活動としての名古屋市文化振興事業団事業運営委員、展覧会企画および講演会等 (6件) など充実した活動をおこなった。
油画	准教授	猪狩 雅則	教務委員では大学の運営方針などを踏まえて適宜発言し、運営参加できてきたと感じている。専攻内では、学生や教員の意見を吸い上げながら、カリキュラムの修正を積極的に行い、より充実したカリキュラムの作成を目指した。学生の指導は、相変わらず難しさを感じているが、学生の特性を見極めながら、対応できてきたように思う。
油画	准教授	安藤 正子	教員四年目ではありますが、研究活動、教育活動、大学運営、社会貢献、それぞれの分野で概ね目標は達成できたと思います。来年以降も引き続き積極的に取り組みたいと思います。
彫刻	教授	土屋 公雄	令和元年度の研究活動においては、「愛知芸大退官記念展」企画として、愛知芸大サテライトギャラリー、豊田市美術館での二人展 (豊田)、古川美術館・為三郎記念館での個展 (名古屋)、マサヨシ・スズキ ギャラリーでの二人展 (岡崎) で展示を行った。委員会では、学生委員会委員並びに芸術情報センター運営委員会 (図書館運営委員会) を務めた。社会貢献としては、「松戸アートピクニック」など継続のプロジェクトにより地域活性化企画を展開しました。以上のことから、自己評価として目標はおおむね達成することが出来た。

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
彫刻	教授	神田 每実	創作分野での成果発表は、国内4、海外1と充実した年度であったと評価するが、風土と造形様式に関する基礎研究等の現地調査等は控えめなものとなった。一方、特に飛騨市宮川町種蔵地区における活動は、官・民・学が対等の関係による自律的な連携を産み始め、瀬戸内国際芸術祭でのMEGI HOUSEの活動成果（大学としての活動は本年度で終了）も併せ、長期的展望に基づく実践の重要性を改めて示し得たと考えている。この事は、地域ごとの歴史や社会の成り立ち等についての理解の努力無しに、継続的・発展的な活動は成し得ないことを示す具体的な事例であると考えられるが、これを学内外における研究活動に対してフィードバックするならば、個々の研究の前提として、多様な視座に立った基礎教育が必須であるとの常識的な結論に帰着する。次年度以降、これらの要素の複合的な組み入れについて更に検討を進め、個々の取り組みと関連の新たな進化を図りたい。
彫刻	教授	中谷 聡	国立新美術館における新制作展をはじめ、現代造形表現作家フォーラム、花とみどり・いのちと心展など、一般に広く公開された場での作品発表を通して研究を深めると共に、社会における生涯学習の一環としての芸術文化の発展に寄与することができた。また、高校生の部活動視察や学校訪問を通して高大連携の芸術教育の在り方を探り、本学において、学生の個性や多様性を尊重する教育活動に生かすことができた。変革期を迎える大学運営においてもさらに情報収集に努め、的確に対処していきたい。
彫刻	准教授	竹内 孝和	研究発表として個展・グループ展を11回行い、また各種委員会にも積極的な関わりができたと思う。カールスルーエ芸術大学と交渉し国際交流展（学生ドローイング展）を来年度開催に向けて動き出したことに安堵し、大きく期待している。社会に対する貢献に関しては今後の課題としたい。
彫刻	准教授	森北 伸	概ね達成出来た。
彫刻	准教授	村尾 里奈	大学運営では5年後に移転となる新彫刻棟の設計のための調査に注力した。複数の他大学施設を訪問し、今後の彫刻専攻の工房のあり方やカリキュラムの検討などを行った。また最近の気候変動を踏まえ来年度からの屋外での実技授業の時期をずらすなどのカリキュラムの見直しも行った。教育活動では3年ゼミの庭園研究旅行の内容の専門性を高めることができた。研究活動では韓国で二つの大規模な個展を実施した。大型彫刻作品の海外輸送の経験を積むこともでき、本学とソウル市立大学環境彫刻学科の学生や教員との交流の場を儲けることもできた。社会貢献として、芸術を通じた日韓友好交流に寄与することができた。
芸術学	教授	中 敬夫	<ul style="list-style-type: none"> ・「研究活動」に関しては、順調に進行したと言ってよい。 ・「教育活動」に関しては、学部に関しては例年通りの順調さだったが、大学院では休みの多い院生に困惑した。 ・「大学運営」に関しては、前期は例年以上に多忙だったが、特に問題もなかった。 ・「社会貢献」に関しては、特に言うべきことはない。
芸術学	教授	小西 信之	現代美術に関わる重要な書物の翻訳2冊（ロザリンド・クラウス著『視的無意識』谷川渥と共訳、2019年3月31日、月曜社／ハル・フォスター、イヴ・アラン・ボワ、ロザリンド・クラウス他著『ART SINCE 1900: 図鑑 1900年以後の芸術』尾崎信一郎、金井直、小西信之、近藤学他訳、東京書籍、2019年6月5日）を昨年は出版でき、大きな成果を出すことができた。紀要にも一本論文を掲載した。今年にはさらにもう一冊の翻訳を出す予定。大学運営、教育と合わせて、今後も研究に勤しみたいと思う。
芸術学	准教授	高梨 光正	今年度はイタリア美術史に関する充実した研究活動とその公開のほか、音楽学部での講義やレクチャーコンサートなどを通じ、美術と音楽の垣根を超えた、音楽画像学、楽器学、音楽と美術の関わりなどに関し、積極的に学外でも活動し、その普及に努めた。

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
芸術学	准教授	本田 光子	7月に育児休業から復職し、研究・社会貢献の分野での活動は限定的であったものの、紀要への投稿と科研セミナーへの運営面での参加、市史編さんのための作品調査などに取り組んだ。教育・大学運営には全面的に従事し、講義は休講が多く不本意であったが、個々の学生の状況に応じた細やかな研究指導に心を砕いた。
デザイン	教授	中島 聡	在籍最終年度にあたり、当初の目標はほぼ達成し、業務引継ぎを滞りなく完了した。
デザイン	教授	関口 敦仁	本年度は、メディアアートに関する学外展示や啓蒙活動に力を入れ、多くに展示企画やアーカイブ活動を行なった。また、新専攻設置に向けて本学の特徴ある新たな方向性を模索し、魅力的な環境とカリキュラム計画を構築した。
デザイン	教授	水津 功	研究面では、(1) 高齢者施設のデザインの意思決定において介護士が果たす役割が大きいことがわかったこと、(2) 視点場のデザインプロセスに関するケーススタディを行ったこと、(3) 公園と市民の関係を深める冊子発行をデザインしたことなどが上げられる。教育面では、(1) 芸術大学におけるデザイン教育にはアート思考とデザイン思考のバランスが重要であるとの認識からカリキュラム再編が行えたこと、(2) 指導した学生が名誉ある受賞を達成したこと、(3) 新たな基礎教育の開発に取り組んだことなどが上げられる。大学運営では、今年も施設整備を中心に責務を果たした。社会貢献では、地域自治体に対する貢献を中心に取り組んだ。
デザイン	教授	柴崎 幸次	概ね、高い成果があった。特に国際交流において、拠点形成事業のセミナーなど充実した内容となった。
デザイン	教授	石井 晴雄	当初の計画に多少の変更を加えながら、成果を出すべく実施している。
デザイン	准教授	今尾 泰三	毎年思う事であるが、年度毎に目に見える成果が現れる事は少ないのではないかと考えてしまう。 今、行ったことがその後には花開くことがあるように思うが、中々めざましい成果として現れて来ないことは自分自身の不徳、力量不足であるのか歯がゆい思いは常に感じている。よりいっそうの努力をしたいと思う。
デザイン	准教授	森 真弓	今年度は昨年度に引き続き、外部連携を意識した社会貢献活動を行った。今後新たなカリキュラムなど教育活動に繋がることを目指す。
デザイン	准教授	夏目 知道	研究・教育・大学運営・社会貢献、ともに予定通り推進することができました。
デザイン	准教授	佐藤 直樹	年度当初に設定した活動計画を遂行し、目標を達成した。なかでも「社会貢献」分野における活動は目標を上回る成果を残すことができたと自負している。
デザイン	准教授	本田 敬	昨年度まで取り組みができなかった国際交流事業を具体的な形で2つ実施することができた。短期間ながらその実施を通して、やはり人と人が直接会って交流することの必要性を強く感じた。昨今、学生も自主的に海外留学に臨むものが増えてきているが、専攻としてもより積極的に取り組む必要性があり、今後はより強化していきたい。

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
デザイン	准教授	春田 登紀雄	デザインは今、未来の構想や社会課題の解決など、人にとってあるべき姿を実現する力として期待されている。また一方で学生には、不変的な芸術分野としてのデザイン表現の探求も大切にしてもらいたい。この「個の表現」と「社会性」の両立は、中長期的な目線で本学が社会貢献する重要な鍵となると考え、まずは教育の礎であるデザイン専攻の「新カリキュラム構築」と「社会連携プロジェクトの実現」に取り組んでいる。
陶磁	教授	友岡 秀秋	産学連携事業とコンペ(CLDA)開催事業に追われている感があるが、私の専門であるプロダクトデザインは、社会との関わりの中核で成り立つものなので、やり甲斐を感じている。また学生達にとっても好影響であると確信している。今後も更にセラミック関連産業の活性化と若手の幅広い人材育成に寄与できる様、努力していきたいと考えています。
陶磁	教授	梅本 孝征	年度を通して研究活動、教育活動、大学運営、社会貢献において、多くの実績と成果を得ることが出来た。主査資格を得た博士後期においては、31年度に向けた良い活動ができた。
陶磁	教授	長井 千春	今年度は、陶磁専攻の指導体制の根幹的な見直しと教育内容の大幅な改善を開始した。また、専攻専門教育として、これまでの陶芸、陶磁器デザインコースに並ぶ第3のコースを2021年度から開始することを確定した。2018年度に交流協定を締結したソウル科学技術大学美術と本学陶磁専攻間の交流展をSAKURAギャラリーで実施した。特にアジアの国々との国際交流事業に積極的に取り組むことができた。
陶磁	准教授	田上 知之介	研究活動、教育活動、大学運営、社会貢献において、目標を達成できました。特に研究活動、博士前期課程の教育方法、国際交流事業において、今後の展開が期待できる充実した取り組み方ができたと感じています。
陶磁	准教授	佐藤 文子	令和元年度の計画に沿って各事項ともに積極的な取り組みを行うことができた。特に研究活動においては、障害者福祉支援活動や子どもを対象としたWSを行うことで、陶芸教育の取り組みと素材への可能性を模索することができ、陶磁器における色彩と原料素材についての研究を行うことができた。次年度においても引き続き、陶磁原料や釉薬分析による多岐にわたる陶芸表現の可能性を探求していきたい。
陶磁	准教授	小枝 真人	研究、教育においては積極的に取り組む事が出来、概ね良好な成果を得た。大学運営に関してはまだまだ理解不足で取りこぼしがあり、専攻に迷惑をかけたと思うので、次年度には改善して行きたいと思う。
教養	教授	清道 正嗣	研究の進捗は予定ほどではなかったが、教育・大学運営については問題なく通常レベルで実施できた。
教養	教授	石垣 享	研究活動においては積極的な活動を行うことができています。特に名古屋大学からの依頼講演は、これまでの研究成果の総括に当たる内容であることから、大きな成果として社会還元が行えた。授業に関しては、単なる体育およびスポーツに留まらず多様な展開を行い、成果が上がっている。社会貢献に関しては、学会の理事長を始めとする重責を果たしていることから、十分な貢献活動ができていたと考える。